



TITLE:

膀胱癌に関する研究(Abstract_要
旨)

AUTHOR(S):

吉田, 修

CITATION:

吉田, 修. 膀胱癌に関する研究. 京都大学, 1967, 医学博士

ISSUE DATE:

1967-05-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212224>

RIGHT:

氏 名	吉 田 修 よし だ おさむ
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	論 医 博 第 358 号
学位授与の日付	昭 和 42 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	膀胱癌に関する研究

論文調査委員 (主 査) 教授 稲 田 務 教授 岡 本 耕 造 教授 翠 川 修

論 文 内 容 の 要 旨

第Ⅰ編： 日本人膀胱癌の統計的および疫学的研究

我が国の膀胱癌発生頻度は、欧米諸国と比較するとかなり低いが、近年上昇傾向にあるとの報告に接する。そこで著者は、本邦人口動態統計より、日本人膀胱癌死亡率の年次推移につき検討し、さらに1962年以降4年間の京大泌尿器科における膀胱癌患者198例と、年令、性別分布を等しくし、悪性腫瘍を除く症例を対照としたものに、環境的、身体的要因に関し、疫学的調査を行なった。

- 1) 1947年以降16年間に、本邦膀胱癌死亡率の明らかな上昇傾向が認められ、男女とも50才以上の年令層に著明である。
- 2) 職業中分類別では、紡績従事者が多く、特に染色関係従事者が多い。
- 3) 近畿地方の膀胱癌患者 447 例の ABO 式血液型分布を、一般日本人と比較すると、危険率5%以下でB型のものが有意に多い。
- 4) 性病の既往を有するものが有意に多い。
- 5) 喫煙習慣を有するもの、特に大量喫煙者が有意に多い。
- 6) 血液型、性病既往に関するこの知見は、内外文献上最初のものであり、喫煙に関するものは、Lockwood (1961), Wynder (1963), Cobb (1965) の報告と一致し、喫煙は膀胱癌発生因子の一つであると推測される。

第Ⅱ編： 膀胱癌患者 244 例の臨床的観察

膀胱癌に関する臨床統計的報告は多いが、早期治療の前提となる報告、一般臨床検査成績と浸潤度との関係の報告がなく、浸潤度別に見た手術的療法の遠隔成績による批判に乏しい。これらの点を解明すべく、著者は過去11年間の膀胱癌患者 244 例の臨床的観察を行なった。

- 1) 初発症状発現後3か月以内受診のものに stage C のものが15%あり、一方2年以上経過のものに stage O, A のものが30%ある。

2) 一般臨床検査所見で、浸潤度と関係のあるものは、赤沈値の亢進、貧血、好中球増多、低蛋白血、高窒素血を数えることができ、特に CRP 反応、PSP 試験、IVP による上部尿路の検査は、術前浸潤度判定上重要である。

3) 有茎性乳頭状癌に対する経尿道的電気焼灼術、膀胱切開による腫瘍切除術施行例の予後はよいが、浸潤性膀胱癌に対する膀胱部分切除術の5年生存率は、stage B: 28.8%, stage C: 14.5% であり、膀胱全摘出術では、stage B: 13.7%, stage C: 11.0% である。

4) 以上の結果より、現時点における早期治療の限界の存在、一般臨床検査のうちで浸潤度判定上特に重要なもの、および膀胱全摘出術の根治性に対する疑問を指摘できる。

第Ⅲ編：悪性度に関する病理組織学的研究

膀胱癌の組織学的悪性度に関しては、従来の腫瘍細胞型別細胞分化度および浸潤度のみでは不十分と考える。著者は過去10年間の膀胱癌患者のうち、全層標本作製し、予後を明らかにした175例につき、予後に影響を及ぼす組織像につき検討した。

1) 従来の腫瘍細胞型別細胞分化度、浸潤度は、かなり適確に予後の公算を告げる。

2) 膀胱壁脈管内腫瘍栓塞像の認められないものの5年生存率は66.1%であるが、認められるものは11.4%と不良である。

3) 塊状浸潤型を示したものの5年生存率は37.9%、触手状浸潤型は7.6%、脈管内蔓延型は9.0%である。

4) 結合織性間質反応は CPL 分類別予後において、細胞滲出性間質反応は滲出細胞完全包囲型の予後において、担癌体の防禦的反応としての意義を見出すことができる。

5) 以上の成績より、予後に影響を及ぼす組織像として、腫瘍細胞型別細胞分化度、浸潤度以外に、膀胱壁脈管内腫瘍栓塞像、腫瘍浸潤形態、間質反応があると考えられる。

論文審査の結果の要旨

京都大学泌尿器科における膀胱癌患者を中心に、疫学的、臨床統計的および病理組織学的研究を行なった。

疫学的研究では、過去16年間に於ける本邦膀胱癌死亡率の上昇傾向を指摘し、本症患者は ABO 式血液型で B 型のものが有意に多いという新知見を得、また性病の既往を有するものが多く、染色工業関係者が多いという成績を得、さらに喫煙は膀胱癌発生因子の一つであると考えられる知見を得た。

臨床統計的観察では、現時点における膀胱癌の早期治療には限界のあることを指摘し、一般臨床検査のうち、癌浸潤度と相関関係にあるものを明らかにし、じゅうらい根治的手術と考えられていた膀胱全摘出術が根治性に乏しく、膀胱部分切除術と比較して、予後の不良であることを指摘した。

悪性度に関する病理組織学的研究では、全層標本の組織学的所見と遠隔成績より、予後に影響をおよぼす組織像に、腫瘍細胞型別細胞分化度および浸潤度以外に、膀胱壁脈管内腫瘍栓塞像、腫瘍浸潤形態および間質反応があることを明らかにした。

この研究は学術上有益で、医学博士の学位論文として価値あるものと認める。